

福岡大学 医学会ニュース

No. 58

福岡大学医学会 福岡大学医学部内

「絆、新たに。」

福岡大学とともに生きる



福岡大学医学医療健康担当副学長
瓦林 達比古

近年、わが国は未曾有の人口減少社会および少子高齢化社会に突入し、この人口構造の変化によって国家のあらゆる制度が不安定になり混乱の状態を呈していますが、現在では政治体制は言うに及ばず、社会保障制度や教育制度など多くの領域で一大改革を余儀なくされています。これは国の成り立ちを考えれば、出生数が減少し続け高齢者が長生き出来るようになったのが国では当然の結果であり、ずっと以前から予測できたこの大きな問題の解決を、現在まで先送りしてきた政治の責任は大きいといえるでしょう。

戦後の日本を振り返れば、いわゆる「団塊の世代」と言われる昭和二十二年から二十四年までの年間出生数は約二七〇万人であり、その後「団塊ジュニア」のピークを除けば年々出生数は減少し続け、現在では年間一〇九万人にまで激減しています。出生数減少の原因は、女性の社会進出による晩婚化や価値観の多様化による未婚率の上昇などが考えられますが、同時に、妊娠・出産・育児に対する政策的な支援の不備がこれに拍車をかけています。少数の若者が多数の高齢者を支えなければならぬというこの人口構造の変化は、医療・福祉や年金制度に特に大きな影響を及ぼしていき、これはそのまま受験人口減少という形で学校経営にも大きな負の影響を与え、大学全入時代の到来が間近となり、学生の質の低下が危惧されています。したがって、今後大学間の学生獲得競争は激化して勝ち組と負け組が明確になり、特により優秀な学生を獲得するために、大学全体の教育体制の見直しや教育の質の向上、そして学生の学習環境の整備が急務です。このような危機感の下に、全国各大学は大学存続をかけて、さらなるブランド・イメージ向上と他大学との違いを鮮明にするアイデンティティ再構築のために学部新設や再編統合にしのぎを削っています。

学院教育と連動させた教育研究活動を行っていきま。また、共通教育センター、言語教育研究センター、エクステンションセンターなどを通じた地域に開かれた教育活動や、一方では、十二カ国の二十九大学一機関と姉妹校協定を締結して学生や研究者の相互派遣および共同研究を積極的に推進し、国際的視野に立った思考力と行動力を備えた人材を育成しています。

さて、ここで学校法人福岡大学を俯瞰しますと、本学は同一キャンパス内に九学部三十一学科と大学院十研究科三十二専攻および九一五床の特定機能病院ならびに筑紫野市に三四五床の地域医療支援病院を持つ地域の一大拠点となる総合大学であり、さらに、福岡市の中央部に付属の大濠中学校・高等学校を有しています。学生数は二・一万人、卒業生は二十一万人を超え、「人材教育と総合教育」「地域性と国際性」の教育研究理念の下に、社会に貢献する多くの人材を輩出してきました。現在も総合大学の長所を生かしながら、時代の変化と社会の要請に応えるべく研究推進部と七つの付置研究所（資源循環・環境制御システム研究所、都市空間情報行動研究所、高機能物質研究所、てんかん分子病態研究センター、先端分子医学研究センター（分子腫瘍学センターより改組）、身体活動研究所（新設）、環境科学技術研究所）を設置し、大

倫理観を兼ね備えた、高度専門職業人を世に送り出すことだと考えております。また法人全体を鑑みれば、両病院ともに法人自体の附属病院であり、域に開かれた教育活動や、一方では、十二カ国の二十九大学一機関と姉妹校協定を締結して学生や研究者の相互派遣および共同研究を積極的に推進し、国際的視野に立った思考力と行動力を備えた人材を育成しています。

歴史的には、本学は昭和九年に福岡高等商業学校として創立され、昭和二十四年に福岡商科大学となり、昭和三十一年に福岡大学と改称されました。本年は創立七十五周年を迎え、協定大学長シンポジウムやノーベル賞フォーラムを始めとして、多くの記念行事が予定されています。その中で医学部は、昭和四十七年に九学部最後の学部として増設され、翌四十八年に福岡大学病院、六十年に福岡大学筑紫病院が開設されました。さらに平成十九年からは医学部に看護学科が設置され現在に至っています。言うまでもなく、医学部の最終目標は道徳・倫理を含めた卒業医学・看護学教育の充実により、卒業生全員を医師や看護師等の国家試験に合格させて世に送り出すことであり、病院の社会的役割は医学・医療実践の場として卒業教育の一環を担い、中核施設として高度医療を地域に提供することです。福岡大学医学部・病院の使命は、社会の要請に応じ幅広い教養と高い

第五十九回福岡大学医学会例会報告
日時 平成二十二年三月四日(水) 十七時~十八時五分
場所 医学部臨床大講堂

- 【進行】集會幹事 岩本 隆宏
- I、開会の辞 集會幹事 岩本 隆宏
 - II、会長挨拶 医学部長 黒木 政秀
 - III、講演 座長 黒木 政秀
講演一 岩崎 昭憲 (呼吸器・乳腺内分泌・小児外科学教授)
「呼吸器外科の臨床と研究―将来を見据えて―」
講演二 松永 彰 (臨床検査医学教授)
「リポ蛋白とアポ蛋白」
 - IV、福岡大学医学紀要第三十五巻優秀論文賞授与式
受賞者 衛藤 暢明 (精神医学)
舌間 崇士 (整形外科)
田中 亮介 (筑紫病院外科)
 - V、受賞論文の要旨講演
講演一 講演者:衛藤 暢明 座長:西村 良二
講演二 講演者:舌間 崇士(代理) 座長:内藤 正俊
講演三 講演者:田中 亮介 座長:前川 隆文
 - VI、閉会の辞 集會幹事 岩本 隆宏
- *福岡大学医学紀要第三十五巻優秀論文賞の論文名および受賞者写真は四面に掲載

新 風

平成20年10月1日付けで昇格された方に
自己紹介をしていただきました。



筑紫病院脳神経外科
教授
風川 清

私は昭和五十七年に防衛医大を卒業しました。高校、大学、卒後と約十五年にわたってラグビーを続け、体力だけが自慢の体育会系人間です。卒後研修は麻酔科からスタートしました。麻酔標榜医を取得した後に、脳外科の救急医療を自衛隊中央病院で研修し、卒後九年目からは国立循環器病センターの脳血管外科に四年間勤務しました。ここでは微小血管吻合術や頸動脈内膜剥離術を習得する一方で当時最先端の医療技術であった脳神経血管内治療の臨床と基礎研究にも携わりました。縁あって福岡徳洲会病院に赴任して脳卒中を中心

とした救急医療に四年間従事し、その後二年間福岡大学脳神経外科にお世話になりました。平成十二年からは筑紫病院で脳卒中の外科治療を主体とした脳外科診療を行っており、特に最近は大動脈からカテーテルを頭蓋内血管まで誘導してさまざまな病変の治療を行う脳神経血管内治療を積極的に取り組んでいます。



筑紫病院泌尿器科教授
平塚 義治

この度、平成二十年十月一日より、筑紫病院泌尿器科教授として昇格いたしました。私は、昭和四十八年に長崎大学を卒業後、直ちに福大泌尿器科に入局、当時は坂本公孝教授、有吉朝美助教授、大島一寛・藤沢保仁両先生の四人体制で、その中に研修医として入りまして、福大医学部も創設期であり、忙しかったけど、研修医でありながら一人前の医師として扱ってもらい、医師としての心構え、技術を鍛えられました。その後、田川市立病院、飯塚病院、米国 UCLA 留学などを経て、平成八年より筑紫病院泌尿器科部長として赴任、現在に至っています。

私、現在まで主に取り組んで来たのは、尿路変向術の研究です。浸潤性膀胱癌に対しては、膀胱全摘除術が唯一の治療法ですが、その後行う尿管皮膚瘻術と回腸導管があり、世界の標準術式はストーマ狭窄を起さず、シングルストーマにできる回腸導管です。しかしこれは腸を利用するため合併症も多く、食事摂取も遅れ侵襲も大きいので、腸を利用しない侵襲も少ない尿管皮膚瘻術の欠点を克服の研究を行い、完成させることに成功、八十

歳後半の人にも次の日に飲水、食事が可能で安心して行うことができるようになりました。従って現在までの、尿管皮膚瘻術や膀胱全摘除術の症例経験数は本邦でも一―二位を占める位置にあります。しかしながら、世界での標準術式は回腸導管であり、今後この方法を日本や世界に広め、少しでも患者さんの負担が少ない術式とするのが私の使命と考えています。さらに、福大の学生さんや泌尿器科教室の若い学生とともに切磋琢磨して、人として医師としての使命を果しながら、その魅力を共に分かち合って行く過程で若い人が成長する手助けができればと思います。努力して行きたいと考えていますので、今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますようお願いいたします。い申し上げます。

このように我々は常に外の風を取り入れながら、筑紫地区のみならず九州全域の脳卒中外科治療のメッカとなるべく研鑽を積んでいます。これまでは臨床を中心とした教育を行ってきましたが、この春から二名の大学院生を抱えてより基礎的な研究指導にも力を注いでまいります。どうかこれらの筑紫病院脳神経外科にご期待ください。



病理学准教授
久野 敏

岩崎宏主任教授のご推薦により平成二十年十月一日付けで病理学講座准教授を拝命致しました。私は昭和五十三年日本大学医学部小児科に入局しました。平成五年三月まで九州大学にいました。小児腎臓病学を専門として教育、診療、研究して

して主に蛍光抗体法および電顕で詳細に形態学を学びました。平成五年四月から平成九年十二月まで新日本製鐵八幡製鉄所病院小児科(現在、八幡記念病院)に勤務していましたが、腎臓病学を生涯の仕事として従事したい気持ちで、福岡大学医学部第二病理学(竹林茂夫主任教授)に平成十年一月に入局しました。それ以来、病理学教室に勤務しています。竹林前教授には腎生検病理学の見方を基礎から学びました。平成十四年四月に旧第一病理学と旧第二病理学が統合し、福岡大学医学部病理学講座として新しく発足しました。統合後は岩崎宏主任教授のもとで病理専門医として必要な病理学の基本と専門知識を学び、病理学の真髄をご教授していただきまし

私の専門分野は腎病理学です。学生教育では糸球体腎炎、尿管管間質性腎炎、腎不全の病理形態学を教えています。これは病理学講座としての教育のみならず、腎臓・膠原病内科、泌尿器科と連携して学生教育に携わっています。診療はあらゆる分野の病理診断と腎生検病理診断が毎日の仕事です。腎生検検体は院内(腎・膠原病内科、小児科、泌尿器科)および院外から年間、約六五〇検体の腎生検検体がきます。現在、腎生検の検体総数は一九、三〇〇検体で、この数は日本では一番多く、世界の施設でも五本指の中にはいる検体数をほこっています。腎臓・

膠原病内科の腎生検症例は、一―二ヶ月に一回行われる腎生検症例検討会で、臨床の先生方と症例に関する意見交換をしています。小児科の症例は福岡県単位で腎生検症例検討会をしています。これは今後も続けていきたいと思っています。気持ちで、福岡大学医学部第二病理学(竹林茂夫主任教授)に平成十年一月に入局しました。それ以来、病理学教室に勤務しています。竹林前教授には腎生検病理学の見方を基礎から学びました。平成十四年四月に旧第一病理学と旧第二病理学が統合し、福岡大学医学部病理学講座として新しく発足しました。統合後は岩崎宏主任教授のもとで病理専門医として必要な病理学の基本と専門知識を学び、病理学の真髄をご教授していただきまし

腫瘍・感染症・内分泌
内科学准教授
高松 泰

一九八七年に九州大学医学部を卒業し、九州大学病院および県立宮崎病院で臨床研修を行いました。その後九州大学第一内科で血液腫瘍学を学び、造血幹細胞移植の臨床と基礎研究を行いました。一九九三年から再び県立宮崎病院で血液腫瘍内科の診療に従事した後、一九九六年にオーストラリアのアデレード大学ハenson癌研究所にリサーチフェローとして留学し

第三十五回福岡大学医学部解剖体慰霊祭は、ご遺族並びにご来賓の方々、本学教職員と学生約四百名が参列し、平成二十年十月十八日(土)午後二時から福岡斎場において厳粛に執り行われました。今回祀られた霊位は、学生の医学教育の目的で、系統解剖のために献体された四十一柱、病院で死去されて病因究明のために病理解剖を御承諾頂いた三十三柱、合わせて七十四柱でした。献灯献花の後、厳粛な雰囲気につつまれて慰霊祭は進行し、黒木政秀医学部長は祭詞の中で、医学の発展のため

めにくくできない類の幸福と福祉に貢献できますよう努力することを誓い致します。と新たな誓いを披瀝されました。勉学、研究に励み、人類の幸福と福祉に貢献できますよう努力することを誓い致します。と新たな誓いを披瀝されました。



移殖する造血幹細胞を骨髄からではなく末梢血から効率よく採取する方法を確立することを目指し、造血幹細胞が骨髄に保持されているしくみや、末梢血へ流出する機序を解明し、充実した三年間を過ごしました。その間に県立宮崎病院でお世話になった田村和夫先生が福岡大学内科学第一の教授に就任され、新しい教室作りに協力すべく一九九九年に帰国し、以後福岡大学で診療・教育・研究に従事しています。

福岡大学での勤務を始めて十年近く経ちますが、その間に医療環境は大きく変わりました。最初の医局名は「内科学第一」

科としての大きな役割となったため、様々な固形腫瘍の化学療法や緩和医療に携わることが増えてきました。日本人の死因で最も多いがんの対策のため、良質な抗がん治療、緩和医療が実践できる専門医の育成、治療成績を向上するための臨床研究を推進し、がん診療の質を高めることができるよう若い医局員と一緒に努力を重ねています。



第35回 医学部慰霊祭

生理学講師

森 誠之



昨年十月に生理学教室講師に就任しました森です。福岡大学に初めて来たときの印象は、緑豊かな山を背後に持つ、静かな良い環境に囲まれていると思えました。着任後一年余が過ぎましたが、九州・福岡は初めて生活する場所でもあり、今でも様々な事が新鮮で、毎日楽しく過ごしています。

小児科学講師

安元 佐和



こちらに来る前は、岡崎国立共同研究機構生理学研究所にて学位取得後、同研究所の助手を経て、米国のジョンズホプキンス大学に六年ほど勤務していました。その間、岡崎から現在に至るまでの間、おおよそ、イオンチャンネルと細胞内カルシウム動体仲介分子との関連性といった生理学の基礎的研究に従事して参りました。この為、福岡大学の中で自分の能力をどのように発揮できるのか、当初かなりの緊張感がありました。今でも教育に關して、どのように展開して進めて行けばよいのか、難しく感じる事が多々あります。特に、自分が生理学を研究している内容と教育内容の隔たりが大きい為、生理学や研究の面白さを学生にきちんと説明できていないように消化不良を感じることがあります。

私は一九八四年に福岡大学医学部を卒業後、母校の小児科に入局しました。

小田 禎一教授、満留昭久教授、現在の廣瀬伸一教授のご指導のもと、臨床小児神経学を専門として、多くの子どもたちとその家族に出会ってまいりました。

研究分野では、新生児の電気生理学の分野で学位を取得させていただきました。末梢神経伝導検査のなかで、Late ResponseであるF波、H波について、新生児の正常値、未熟児と成熟児の発達の違いについての研究が主体です。臨床においては、

小児のてんかんの脳波を中心とした診断学と治療、発達障害をもつ子どもたちの診断と家族への支援、医療と教育、福祉との連携に微力を注いでおります。教育分野では、後輩である福岡大学医学部の学生教育、若い小児科医の育成に役に立てればと努力しています。

肝臓洞微小循環からみた肝疾患の研究を行ってまいりました。臨床面では、久留米大学救命センター、社会保険田川病院、国立病院九州医療センターで勤務しております。臨床に帰ってからは、消化器疾患のなかでも、ウイルス性肝炎のインターフェロン治療や肝臓の局所治療に興味を持っています。二〇〇〇年当時、社会保険田川病院に勤務しておりましたが、その頃は肝臓の局所治療はエタノール注入療法が主流でした。しかし、久留米大学でもまだ導入していません。経皮的マイクロウエーブ凝固療法を田川病院に導入しました。二〇〇〇年には、同じく田川病院で肝臓のラジオ波焼灼療法も導入いたしました。肝臓のラジオ波焼灼療法は現在の主流ですが、当時は、九州大学も福岡大学もまだ導入していませんでした。田川の片田舎でも、主治医が様々な努力をすることで、最新の治療をすることができました。その後、久留米大学を退局し、ある病院に勤務していましたが、訳あって一年で退職しました。その時、行き場のない私を救ってくれたのが福岡大学消化器内科の向坂彰太郎教授でありました。向坂教授は久留米大学時代の私の恩師でありました。そのような縁から平成十七年(二〇〇五)四月より福岡大学で勤務させて頂くようになりました。



消化器内科講師

釈迦堂 敏

昭和六十年(一九八五年)久留米大学医学部を卒業し、久留米大学第二内科(現消化器内科講義座)に入局致しました。当時の谷川久一教授のご指導の基に肝臓洞内皮細胞の超微形態の研究を行い、平成元年(一九八九)久留米大学大学院を卒業しました。その後も、

で、当然、消化管疾患にも興味を持っています。また、消化器内科医である前に内科医であり、最新の知識は常に身につけるように努力すべきと考えています。幸いに福岡市内では、医師会や製薬メーカー主催の勉強会が週に五、六回は開催されています。私は高血圧や糖尿病、呼吸器疾患などの学会には所属していませんので、最新の疾患概念、治療法、ガイドラインなどは、このような研究会に参加することで得るようになっています。大学病院は専門領域が細分化されており、若い医師は専門領域の知識や技術の習得に強く惹かれるところがあるように見えます。もちろん、それも重要なことですが、私は福岡大学の学生や若い医師達に専門領域以外にも勉強しなければならぬことがたくさんあるということ伝えていきたいと考えています。なまじきなことを書いてしまいましたが、今後ともご指導ご鞭撻をよろしくお願致します。

消化器外科講師

星野 誠一郎



私は平成三年宮崎医科大学を卒業後、すぐに民間の病院に就職しました。最初の二年間は当時まれな方でしたが三日に一回の当直をしていました。今行われている臨床研修制度の数倍忙しかったと思います。現時点で振り

返るとその時の経験が現在の私の糧になっていると思います。手術、検査づけの臨床中心の生活をしていたのですが、平成十二年四月ある方の紹介で旧第二外科(白日教授)にお世話になることになりました。それまで大学医局に所属したことがない私にとつて右も左もわかりませんでした。山先生(現消化器外科教授)をはじめ前川先生(筑紫病院外科教授)らに良く指導していただき、平成十八年には「Effects on DNA and RNA after

the Administration of Two Different Schedules of 5-Fluorouracil in Colorectal Cancer Patients」で学位を取得させていただきました。現在大腸癌治療のチーフの立場で手術、化学療法、臨床および研究を中心に診療にあたらせていただいております。今ではありますが、手術治療件数のニーズはまだ少なく、魅力ある外科医、消化器外科医をアピールできるよう精進する所存であります。今後とも宜しくお願い致します。

教室紹介 筑紫病院脳神経外科

私たち福岡大学筑紫病院脳神経外科は、昭和六十年七月の当地における病院開設当初からその中核診療科の一つとして、広く脳神経外科領域全般の診療を行ってきました。現在は田中彰教授、風川清教授を中心とし、特に脳血管障害の外科治療、脳神経外科疾患の血管内治療に力を注ぎ、来べき高齢化社会の時代の要求にこたえるべく研究を重ねています。

平成十二年四月、私たちは脳動脈瘤の治療を、開頭せずに太ももの付け根の大腿動脈から挿入したマイクロカテーテルを通して、プッチナ製の柔軟なコイルを充填し動脈瘤内の血流を途絶させる血管

内治療を第一選択として、以後、これまでに九〇〇例を超える症例を経験し、優れた治療成績を収めています。同様に頸部頸動脈狭窄症に対しても、バルーンで狭窄部を拡張した後にステントを加え、数少ない日本脳神経血管内治療学会の研修施設に認定されています。そのため他大学や他病院の医師、医療従事者に対して手術見学やカンファレンスへの参加を常時開放して、最新の技術や知識の啓発に努めています。

現在福岡大学筑紫病院脳神経外科には他院への出向中の医師を除いて十名のスタッフがいます。うち八名が脳神経外科専門医、四名が脳神経血管内治療学会の指導医です。どうか筑紫病院脳神経外科を宜しくお願いいたします。



祝 福岡大学医学紀要35巻 優秀論文賞

五十音順

衛藤 暢明 (精神医学)
福岡大学病院救命救急センターに搬送された自殺企図者の実態
—平成14年度～平成17年度の調査—

舌間 崇士 (整形外科)
Comparison of Radiographic and Clinical Results Between Conservative and Conventional Femoral Components in Total Hip Arthroplasty

田中 亮介 (筑紫病院外科)
Outcomes of Surgical Repair after Bile Duct Injury during a Laparoscopic Cholecystectomy



優秀論文賞受賞者を囲んで
(左から 黒木教授、西村教授、衛藤先生、田中先生、前川教授、岩本教授)

「第11回福岡大学医学会賞」 論文募集

- 賞の目的**
福岡大学医学部、病院および筑紫病院の研究活動を促進することを目的とする。
- 対象**
対象とする論文は、福岡大学医学部、病院および筑紫病院の研究活動にて作成され、平成20年1月から平成20年12月に発表されたものとする。
論文の筆頭著者は本学会会員で、論文発表時に年齢が40歳未満の者とする。
但し、福岡大学医学紀要に掲載されたものは除く。
- 応募方法**
医学部各教室、病院および筑紫病院各部門からの推薦論文を2編以内(1人1編)を目安としてとりまとめ提出する。(別刷各3部を添付)
- 応募締切** 平成21年6月8日(月)
- 提出先** 福岡大学医学会担当 大山
(福岡大学医学部内 TEL 801-1011 内線3023)
- 選考方法**
 - 応募された論文別刷を医学会評議員に回覧して、7～8月に開催予定の評議員会において3編以内を選出する。
 - 選出された論文の著者は、9～10月に開催される福岡大学医学会例会の席で各15分間の講演を行う。
 - 各講演を聴取した後に、評議員および聴衆が投票を行う。但し、評議員の1票は聴衆の5票に該当する。
 - 投票の結果により、金賞1名以内銀賞2名以内を決定し、医学部長が受賞者の表彰を行う。
 - 審査の結果は、福岡大学医学会ニュースにて公示する。
- 副賞**
金賞は10万円、銀賞は5万円とする。

教室紹介

小児科学

二〇〇六年四月から第四代廣瀬伸一教授のもとに新しい福岡大学小児科学教室がスタートしました。診療はもちろんのことと研究、教育においても医局員全員が意欲的に取り組んでいます。

■診療

年間外来患者数は約一七、〇〇〇名で、そのうち新患者数は約一、三〇〇名です。主に各専門領域の疾患患者が受診しています。最近では発達障害の患者さんが増加しています。その他小児期から診療している十八歳以上の慢性疾患の患者さんも多く受診しています。年間入院患者は年々増

加しており、平成十九年度は一、〇〇五名で、平成二十年度は二月一日現在で九〇〇名を越えており、前年度を上回るの確実です。病棟は構造上の問題、設備の多少の老朽化は否めないものの、入院した親子がよい良い入院生活を送れるようソフト面でカバーしています。また、長期入院の子どもたちのために院内学級の併設されており、子どもの体調に合わせた教育を行っています。さらに、福岡大学小児科では開設時より保育士が配置されており、子どもたちの日常生活の援助・遊びの提供・季節の行事を行うことで社会性を養い、入院生活を楽しく潤いのあるものに行っています。

■研究・学会

季節の行事には医師・看護師も参加し、意外な人が意外な面をみせることもありです。平成十年に国および県より、総合周産期母子医療センターの指定を福岡市内で初めて受け、周産期医療の中心的医療施設として機能しています。周産期の治療だけでなく、退院後も母子のフォローアップを行っています。福岡大学小児科は専門的かつ高度医療を必要とする患者のみならず、小児救急医療の重要性が認識されている現在、福岡市急患診療センターの二次病床としての救急患者の受け入れ要請に積極的に対応しており、福岡市立こども病院の人工島移転も計画されており、今後はこれまで以上に小児疾患の紹介患者の増加が見込まれます。

■教育

臨床研修プログラムの必修科目として、二次研修医の指導を行っています。さらに平成二十一年度からは、小児科に重点を置いたコースを開講します。これは、将来小児医療に貢献できる臨床医を育てるためのもので、二年次の選択科目をすべて小児医療にあてられ、最大八か月小児医療の研修が可能です。

BSLでは、自主性を尊重し、可能な限り子どもたちと接する時間をとり、またさしにbed sideの学習を実践しています。また、「学生によるミニレクチャー」という新しい試みを始めました。これは、学生が小児科BSLで学んだことを、学生同士でディスカッションするもので、自分自身で考え、判断できる能力を養うのに有用と考えています。

■その他

福岡大学小児科ワークショップを年一回行っています。福大関連病院の医師、看護師が一同に会し、テーマを決め、全員でディスカッションします。平成二十一年は「より良い支援者になるために」をテーマに、〇〇名の参加者があり、熱い討論がなされました。現在、少ない子どもをより大切に育てたいという傾向が強まり、小児科医の需要が増してきています。ま

た、専門的な知識や高度な医療技術を持ち、子どもの心の問題にも対応できる小児科医を望む親も増えてきており、小児科医には広汎な領域に対応することが求められています。福岡大学小児科は、持ち前の明るさとチームワーク、フットワークの良さでこのようなニーズに応えるべき努力を続けていく所存です。紙面の関係上本文でご紹介できなかった情報もまだまだたくさんあります。

福岡大学小児科

「福岡大学小児科」で検索していただき福岡大学小児科ホームページにアクセスしていただければ福岡大学小児科の魅力をご確認いただけます。どうぞお気軽にアクセスしてみてください。(医局長 井上 貴仁)

お知らせ 平成21年4月より新設講座および講座名が変わります。

医学科臨床講座名	診療科名
腫瘍・血液・感染症内科学	腫瘍・血液・感染症内科
内分泌・糖尿病内科学(新設)	内分泌・糖尿病内科

学位取得

次の方は、平成20年10月1日付けで福岡大学より医学博士を授与されました。

論文提出による学位取得者

馬場みちえ (看護学科 准教授)
要介護と残存菌に関する疫学研究

小柳 緑 (細胞生物学 助教)
ZFAT expression in B and T lymphocytes and identification of ZFAT-regulated genes

古屋隆三郎 (泌尿器科学 助教)
In vitro synergistic effects of double combinations of β -lactams and azithromycin against clinical isolates of *Neisseria gonorrhoeae*

相川 博 (筑紫病院脳神経外科 助教)
Rebleeding After Endovascular Embolization of Ruptured Cerebral Aneurysms

矢野 豊 (筑紫病院消化器科 助手)
Risks and clinical features of colorectal cancer complicating Crohn's disease in Japanese patients